役人転生～外伝～

トマホーク

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

文部科学省学園艦教育局長に転生してしまった不運なガルパンおじさんの奮闘記。の外伝となります。

目次

新章　役人争奪戦（物理）
ケジメの付け方 ―― 1
戦場へ ―― 5
乙女達の決意 ―― 11
狼煙 ―― 16
ヘタレ達の決死行 ―― 21
圧倒 ―― 25
虚勢と本音の狭間 ―― 32
遁走 ―― 36
狂喜と凶喜 ―― 43

新章　役人争奪戦（物理）

ケジメの付け方

はぁ……あの試合からあっという間に1ヶ月が経ち、ようやく試合後のごたごたが落ち着いたので今現在かほさんの出頭命令に従い西住家本家へと向かっていますが。

……聖グロリアーナ女学院の戦車道ＯＧの方々が同窓会と称して各地で戦車道の試合を開催し、チャーチル・クロコダイルで〝たまたま偶然〟牟田元大臣や文科省の上層部の方達の家々やら別荘やらを焼いてしまったり。

懇意にしていた記者がどこから入手したのか、大洗廃校の裏事情を記事にして暴露してくれたお陰で私が聖人の如く持ち上げられてしまっていたり。

みほちゃん達の勧誘競争が身の危険（意味深）を感じる程激化したり。

口には出せないような出来事があったりと試合後のゴタゴタは本当に大変な事ばかりでした。

「……このまま帰っちゃダメですかね」

さて、過去に思いを馳せている間に西住家の前に到着したのですが……この立派な門が私には魔王城か何かの入り口にしか思えません。

何故なら私はこの後、島田流への移籍を仮とは言え承諾していた事についてかほさんからお叱りを受けねばならないのですから。

……うん。少し周りを散歩して心を落ち着けてからまた来ま――

「ようこそいらっしゃいました。辻様。かほ様がお待ちです。どうぞ中へ」

「……」

菊代さん。貴女はエスパーか何かですか？

「さて、早速だけれど私に黙って島田流への移籍を賭けていた事について何か申し開きはあるかしら？」

「……いえ、ありません」

かほさんが住まう西住家の離れの広間に通され、断罪の時を待つ罪人のようにかほさんの前で正座している訳ですが。

……かほさんの笑みが恐いです。抵抗する術を持たずただ震えるしかない無力な獲物をどう嬲ってやろうかという獰猛なその笑みが恐いです。

「そう。申し開きは無い。つまり……覚悟はもう出来ているという事でいいのかしら？」

「はい。どのような罰でも謹んでお受け致します」

しかし、どんな処罰を言い渡されるんでしょうかね。

……小刀を渡されて腹を切れとか言われなければいいんですけど。
「はぁ……全く。貴方ときたらいつもそう。少しくらい言い訳をしたらどうなの？これじゃあちっとも苛め甲斐がないじゃない」
「そ、そう言われましても……」
やっぱり苛める気だったんですね……。
「ま、いいわ。今回の件はおとがめ無しよ」
「え？」
「だって、みほの為に動いていた貴方を罰したんじゃ可愛い孫に嫌われてしまうもの。それに色々と面白いモノを見せてもらったし今回は特別に許してあげるわ」
「……」
これは……夢ですか？いや、一度安心させておいてから地獄へ突き落とすつもりですね!?
「あら。鳩が戦車砲食らったような顔してるわよ。そんなに意外かしら？」
「恐れながら」
あれ？もしかして本当に助かりましたかこれ？
「貴方は私をなんだと思っているの？でも、まぁ……無罪放免とはいえ何事にも〝ケジメ〟を付ける事は必要よね？」

やっぱりそうなるんですか!?

……はぁ、一体どんなケジメを付けさせられるんでしょうか。

戦場へ

あぁ……空が青いです。

「おーい。いい加減に現実を見てくれないか？」

何て酷い奴なんでしょうか、常夫は。現実を見ろだなんて。

しかし、常夫が言うようにいつまでもこうしている訳にもいきませんか。

「はぁ……分かりましたよ」

さて。私は今かほさんに言われたケジメを付けるため戦車道における聖地――東富士演習場にやって来ています。

相棒であるＳｔｒｖ．１０３――通称Ｓタンクと共に。

常夫はオマケみたいなものです。

「しかしお前も大変だな。お義母さんの命令で花嫁選びの試合をやる事になるなんて」

「花嫁選び等ではありません!!ただ私との交際権が賭けられているだけです!!」

「……どっちにしろ、ほとんど一緒じゃないのか？」

……それを言わないで下さいよ。

はぁ、頭が痛い。ケジメを付けてもらうとは言われましたが……まさかこっちのケジ

メと事を絡めてくるとは。
　時間も機会もあったのにいつまでも相手を決めない貴方が悪いのよ。と、かほさんには言われましたが……あの方は絶対に面白がってやっているだけです。
　黒い笑みを浮かべながら相手は見繕っておいたから。とか言ってましたし。
「それにしても４時間逃げ切ればお前の勝ちとはいえ、この試合設定は少々きつくないか？」
「まぁ……それなりに」
　何せ対戦相手がこんな感じですからねぇ。

　大洗女子学園代表
　Ⅳ号戦車・駆逐戦車ヘッツァー・Ｂ１　ｂｉｓ・ポルシェティーガー。
　聖グロリアーナ女学院代表
　チャーチル歩兵戦車・マチルダ歩兵戦車・クルセイダー巡航戦車・トータス重駆逐戦車。
　サンダース大学付属高校代表
　Ｍ４シャーマン（７５ｍｍ砲搭載型）・Ｍ４Ａ１シャーマン（７６ｍｍ砲搭載型）・シャーマンファイアフライ×２。

アンツィオ高校代表
Ｐ４０重戦車・ＣＶ３３カルロヴェローチェ（２０ｍｍ対戦車ライフル搭載型）×２・Ｍ４０セモベンテ。
プラウダ高校代表
Ｔ―３４／８５×２・ＫＶ―２・ＩＳ―２。
黒森峰女学園代表
ティーガーＩ・ティーガーＩＩ・パンターＧ型×２。
知波単学園代表
九七式中戦車（新砲塔）チハ×２・九五式軽戦車ハ号×２。
継続高校代表
ＢＴ―４２・ＢＴ―５・Ｔ―３４／７６・ティーガーＩＩ。
大学選抜代表
センチュリオン×４。
自衛隊代表
１０式戦車×４
文部科学省代表
ヤークトパンター×４

何だかみんなのヤる気が伝わってくるような気がして怖いです。
特にダージリン君なんて私が手配したトータスを投入してきていますし。
というか、蝶野一尉や高島君まで参戦してくるなんて……どうなっているんでしょうか。
「見れば見るほど厳しいよな。1チームに付き4輌までと言っても11チームがエントリーしてるから44対1。それに残り1時間になってからの参戦にはなってるけど自衛隊代表の最新鋭戦車――10式戦車を4輌も相手にしないといけないし……勝算はあるのか？」
「もちろん。仮にも西住流の元師範代ですよ？この程度で負けていたらやってられませんよ。……というか負けられません」
「……モテる男は辛いねぇ。で、一番聞きたかったんだが何で僕がSタンクに同乗する事になってるんだ？」
「ハンデです」
「ハンデ？」
「ええ、私が本気を出すとつまらないからとかほさんが」
戦車道の事となるとあの方は本当に自分が楽しめるかどうかでしか物事を考えなくなりますからね。

困ったものです。
「あぁ……そういう事か……お義母さんもお人が悪い」
「本当にですよ」
「おっと。喋っている間にそろそろ試合開始の時間だぞ」
「では乗り込みましょうか」
ふむ。少々気合いを入れますかね。
「あぁ……って、その前に確認なんだが。本当に積み込むのは榴弾が４発と発煙弾が３６発、空砲が１０発でいいのか？」
「はい。元より逃げるだけですし戦後戦車の大砲を攻撃に使うのは卑怯ですからね。まぁ、流石に１０式戦車には榴弾を使わせてもらいますけど」
「それなら以前の時みたいに砲を旧式の物に変えれば良かったのに。というか、装甲もほとんど外しているから防御力的な意味合いでは同等なのにこれじゃあハンデが過ぎるんじゃないか？」
「そうかもしれませんが……ま、何とかなるでしょう」
「……お前がいいならいいけど」
そんなに不安そうな顔をしなくても大丈夫ですよ。
「じゃあ、始めましょうか」

「了解」
　では、久し振りに頼みますよ。相棒。
「よいしょっと。ふぅ……各部チェックはどうですか？」
「問題なし」
「そうですか。それでは……本当の戦車道というモノを皆に教えてあげましょうかッ!!」
　うーん。流石に昂って来ましたね。
　久しく感じる事の無かった感覚ですが……この感覚はやはり心地いいです。
「お前って本当に戦車に乗ると性格変わるよな」
「放っといてください」
　さぁ、やってやりますよ。

乙女達の決意

みほｓｉｄｅ

お祖母ちゃんがくれたこのチャンス……絶対に物にしないと。

「みんな準備はいいですか？」

「あぁ、いつでも行けるぞ」

「準備万端です、西住殿」

「私も大丈夫です」

「えへへ～この試合に勝ったらイケメンで優しい歳上の彼氏ゲット～ちょっと年の差がありすぎるような気もするけど大人の彼氏っていうのも良いよね～えへへ、楽しみだなぁ～」

あれ？沙織さんは何を言っているのカナ？

「……沙織さん？」

「え？なに～みぽり――ひぅ!?」

「準備は大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ!!ごめんね!!ちょっと浮かれちゃってて!!（顔が!!みぽりんの顔が!!）」

「そう……気を付けてね？」
「う、うん……ほっ」
「でもね、沙織さん」
「は、はい!!」
「おじさんを独り占めしようとするのはいけないと思うんだ」
「ヒィッ!!」
　沙織さんとはお話する必要があるかも。
　試合前だけどちょっとⅣ号の車内から出て向こうの茂みで――
「西住さんの言う通りだぞ、沙織。この試合で廉太さんの車輌を撃破出来れば廉太さんとの交際権をもらえるが、それはあくまでもチームに対しての話だ。チーム内の誰が交際権を得るかはまた別の話なんだからな」
「そうですよー武部殿。抜け駆けはダメであります」
　良かった。麻子さんと優花里さんはちゃんと話が分かってるみたいで。
「ご、ごめんなさい。反省してます」
　うん。沙織さんも分かってくれたみたいだからお話はもういいかな？
「フフッ、皆さん楽しそうです」
「楽しそうって……あのね、華。私は今まさに命の危険に晒されていたんだけど……」

「フフフッ」
「笑って誤魔化された……やだもー!!」
　さてと、後は試合が始まるのを待つだけだよね。
「そういえば西住殿、我々はこの戦いどう動くのですか？」
「えっと、とりあえず……会場の中央付近まで進んで後は様子見かな」
「え？私達は動かないの？みぽりん」
「うん。他のチームの動きを見てから動こうと思って」
　４時間もある戦いで最初から飛ばしていたらバテて肝心な時に動けなくなっちゃうし。
　それに体力と気力が十分にあるおじさんを捉え（狩）るのは難しいから弱った頃合いを狙わなきゃ。
「で、でも、私達と蝶野さん達以外の３６輌で攻められたらあっという間に辻さんが撃破されちゃうんじゃ……」
「大丈夫だよ。沙織さん。おじさんはそんなに柔じゃないから」
「そうなの？辻さんって何だかちょっと気弱そうな感じだし、あんまり強くないんだと思ってたんだけど」
「えっとね……多分だけど、おじさんに勝てるのは各流派の家元クラスの人だけだと思

う」
　あのお母さんだって苦戦するって言ってたし。
「え〟……そんなに強いの辻さんって!?」
「そんな事も知らなかったのか？沙織は」
「廉太殿の強さは戦車道界隈では有名ですよ？今でこそ戦車道から遠退いているために話題にはなりませんけど昔は常勝不敗のＳタンク乗りとして伝説になっていたぐらいですし、異名も沢山あって……無幻機動とか。それに１００輌潰しや跳弾での２輌同時撃破なんて逸話もありますね」
　あーそう言えばそんな話もあったっけ、すっかり忘れてたなぁ。
　だって昔の話をしようとするとおじさんいつも頭を抱えて蹲っちゃうから。
　そのせいでウチではおじさんの昔の話はタブーみたいになってたし。
「へぇーそうだったんですか」
「で、伝説……」
　あ、そうだ。あの事を沙織さんに伝えておかなきゃ。
「それとね、沙織さん。これも知っておいて欲しいんだけど……おじさんは戦車に乗ると性格が変わるから沙織さんの知っているおじさんが相手だと思わない方がいいかも」
「戦車に乗ると性格が変わるって、流石にそれは冗談でしょ？みぽりん」

冗談じゃないんだけどなぁ……。

『――……本当の戦車道というモノを皆に教えてあげましょうかッ!!』

ほらね。

「……うん。ごめんね、疑ったりして」

何か沙織さんが影を背負ってるけど大丈夫かな？

あ、試合開始の合図だ。

「それじゃあ、気合いを入れて行こうね。みんな」

「あぁ」

「もちろんです!!」

「分かりました」

「うん!!分かった!!」

絶対に逃がさないからね？おじさん。

狼煙

お、試合開始ですね。
「始まったな。……これからどうするんだ？」
「とりあえず市街地に隠れて時間を稼ぎましょう。Ｓタンクは車高が低いので下手な所に隠れない限り見付かる事はないでしょうし」
「そうだな」
序盤から正面切って戦うのもありですが、何かあった場合に備えて体力を温存しておくに越した事はないですからね。
「では、移動――」
『ファイアーッ!!』
え？
「……なぁ、今の掛け声は何だと思う？」
「……さぁ？」
何か無線機からケイ君の勇ましい声が聞こえたんですけど。
向こうで何かあったんでしょうか？もしかして同士討ちでも始め――って!!このロ

ケット推進音はまさかッ!?
「た、対ショック姿勢!!」
「へ？」
あぁ、もう来ました!!Ｍ８ロケット弾の嵐が!!
「ッ!?うわぁあああッ!!」
「ぬおぉおおおッ!!」
何で私がこんな目にー!!何で砲撃の嵐を浴びねばいけないんですかー!!
「……はぁはぁ」
「……ふぅ」
お、終わったんですかね？
……うわぁ、辺り一面焼け野原になってますよこれ。無傷で済んだのが奇跡です。
いや……流石に無傷とはいきませんでしたか。至近弾で右の履帯が切れてしまっています。
まぁ、直撃しなかっただけマシですか。
しかし、初っぱなからとんでもない目に合いましたね。
『た、隊長？今さらなんですけど試合の開始直後に不意討ちでロケット弾なんて使って良かったんですか？』

『いいのよ、アリサ』
『しかし、これでは隊長がよく言っているフェアプレイじゃないような……』
『アリサ。これは戦車道の試合じゃないの……戦争よ。何が何でもどんな手段を使ってでも勝つの。いいわね？』
『イ、イエス、マム!!』
……ケ、ケイ君？え？戦争？
「なぁ、1つ言っていいか？」
「……何です？」
「完全に殺りにきてるじゃないか!!」
「私も予想外ですよ、こんな展開は」
まさかシャーマンの派生型の1つであるカリオペの装備を引っ張り出して来るなんて。
使ってくるとは思っていなかっただけに不意を突かれてしまいました。
「ここに居たら巻き添えになって僕まで殺される!!僕は降りるぞ!!」
「あ、この!!逃がしませんよ!!こうなったら死なば諸共です!!」
「嫌だー!!頼むから離してくれー!!僕はまだ死にたくないんだー!!」
「大丈夫です!!この世界に硬◯戦はありませんから!!死にはしません!!だから早く通信

手席に戻って下さい!!」

至極安全な世界なんですから最後まで付き合ってもらいますよ!!

「意味不明な事を言ってないでその手を放してくれー!!というか、その言い方だと死なないだけで死にそうな目には合うんじゃないか!!」

「うっ!?それは、その……あ。そうだ!!貴方としほさんの結婚の時は私が骨を折ってあげたじゃないですか!!私があの時どんな苦行に耐えたと思っているんです!!」

「その件についてはありがとう!!……だが、それとこれとは話が別だー!!」

「えぇい!!いい加減に諦めて下さい!!」

おっさん2人で無駄に争っている暇なんて無いんですよ!!

早く履帯を直して移動を――また推進音!?

「うへっ!!」

「ひぃっ!?」

今度は2発だけでしたが……威力が先程とは桁違いでしたね。

って、あーあ。今度は左の履帯が切られてしまいました。不味いですね、完全に行動不能です。

……しかし、今度は誰がロケット弾による攻撃を行ったんでしょうか?

『手応えなかったってさ、ミカ』

『残念だったね』
『ま、そういう事もあるさ。風は気紛れだからね』
あ、まさか……ミカくんの所のＢＴ―５って本当は４２０㎜の大型ロケット弾を２発搭載しているＲＢＴ―５だったりします？
……はぁ、この分だとみんな車輌に何らかの改造を施していると見ておいた方がいいですね。
そうしないと予想だにしない攻撃を受けかねません。
全く、この先……一体どうなるんでしょうか。

ヘタレ達の決死行

うーん。ロケット弾による開幕直後の砲撃によって切れてしまった左右の履帯を常夫に２０分という短時間で繋ぎ直してもらってから大急ぎで市街地へと向かっているのですが……間に合いますかね？

「イテッ!?おいおい、もう少し安全運転で頼む。車体が跳ねた勢いで頭を打ったぞ」

「時間が無いんですから無理ですよ、それにもう少しで市街地なんですから我慢して下さ――おぅ……」

「うん？どうしたんだ？今度は急に止まったりして」

「……１２時方向、距離３０００」

「前？……あちゃー」

これは少々厄介な状況です。よりにもよって市街地の前に広がるだだっ広い平原で５輌の戦車に捕捉されてしまいました。

『コーチ発見!!私達が一番乗りよ!!』

『絶好のチャンス!!』

『ここで確実に撃破してやるわ!!』

『本当に居た……何で辻さんがここに居るって分かったの？ミカ』
『フフッ、風が教えてくれたのさ』
　５輌の内訳は大学選抜代表のセンチュリオンが３輌と継続高校代表のＢＴ―４２とＢＴ―５の２輌。
　つまりアズミ君、メグミ君、ルミ君、ミカ君に見付かってしまいました。
「もう見付かったか……この辺りに隠れられる場所なんか無いけど、どうするんだ？」
「どうもこうも……立ち塞がるというのであれば排除するしかないでしょう。西住流に退くという文字は無いんですし」
　というか、ここで退いたりなんかしたらかほさんとしほさんに何をされるか（ガクブル）
「それもそうか。あ、やるのは構わないが出来るだけ安全運転で頼む。特にお前の得意な無幻機動はくれぐれも勘弁してくれ。やったら吐くからな」
「分かっていますよ」
　さてさて、それでは予定を変更して一戦交えましょうかね。
　……それはそうとこの場に居ない愛里寿君や継続高校の他の２輌――Ｔ―３４／７６やティーガーＩＩは今頃何をしているんでしょう？
「なぁ、そう言えば１つ気になる事があるんだが」

「何ですか？」
「市街地を挟んだ向こうの方から撃ち合っているような砲声が聞こえないか？」
「……」
空耳だと思いたかったのですが常夫も聞こえているとなるとこれは……。
『ここは通さない。勝つのは私達』
『強豪校の足止めしろなんて……ミカも無茶を言ってくれるね』
やっぱり市街地の向こうにある森の中で仁義なき戦い――バトルロワイヤルが始まっているようです。
本試合における特別ルールでは他チームの妨害を禁止するとは定められていなかったのでルール違反ではないですけど……まさか本当にやるとは。
しかし、状況から見て大学選抜代表（愛里寿君）と継続高校代表（ミカ君）は島田流同盟のようなものでも結んだんですかね？
まぁ、従姉妹の間柄である2人なら一時的に同盟を組んでいたりしても不思議ではありませんし、共闘するのも禁止されていないのでルール的には問題はないのですが。
『シット!!市街地を盾に遅滞戦闘とはやってくれるわね!!――ナオミ!!援護して頂戴!!
アリサ達は私に続きなさい!!』
『分かった』

『了解!!』
『うぐぐ……前に進めないぞ!!』
『どうします、姐さん?』
『しょうがない。コンパス作戦だ!!』
『了解っす!!』
『ノンナ!!クラーラ!!何としても突破するのよ!!』
『分かっています』
『ダー!!』
『守りが固いな……エリカ、頼めるか?』
『っ!!はい!!隊長!!』
『流石は島田流の次期後継者なだけあるわね。ペコ、トータスはまだ来ないのかしら?』
『まだ暫く時間が掛かるそうです』
『そう……やっぱり機動戦重視にすれば良かったかしら。まぁいいわ。ローズヒップ、貴女の出番よ』
『お任せ下さいませ!!ダージリン様!!』
おっと向こうの戦いが動くみたいですし、こちらもそろそろ動きますか。

圧倒

「では行きますよ」
「了解」
　さて、後続が来る前にささっと終わらせてしまいましょう。
『相手はあのコーチ』
『チマチマ出し惜しみしてる余裕は無いわ』
『だから最初から全力のバミューダアタック!!』
　まずは真正面から突っ込んで来るアズミ君とメグミ君とルミ君のお相手からですね。
　２手に分かれて左右からの挟撃を狙っているミカ君達は後回しです。
「発煙弾装填。目標１２時方向、距離２５００……撃っ!!」
　とりあえず在りし日の勘を頼りに撃ってみましたが……どうでしょうか？
『ッ!?そんなッ!?……こちらメグミ、照準器損傷!!戦闘続行不能!!』
『メグミ!?嘘でしょ!?』
『この距離で照準口の小さい穴を的確に撃ち抜いてくるなんて……流石はコーチ』
　おぉ、上手い具合に狙った場所に命中しました。発煙弾なので撃破は出来ませんが、

これで照準器の修理が終わるまでメグミ君は戦力外です。
「まずは1輌……」
『脱落したメグミの為にも何としてもここで仕留めるわよ!!撃てー!!』
『分かってる!!当たれーッ!!』
『ちょっと!!私はまだ撃破された（リタイアした）訳じゃないんだけど!?』
おやおや。メグミ君を一時的に失った事で焦ったのかアズミ君とルミ君が撃ちまくってきます。
しかし、数撃ちゃ当たるの戦法では私を仕留められませんよ。お二人さん。
「単調な攻撃は無意味です」
そーれそれそれー。
『クッ、相変わらず機動が読めない!!』
『えぇい!!くるくるくるくるちょこまかと!!』
フハハハッ、どうですか。ナポリターンの連続技――別名、無限機動。
独楽のように回転しつつ不規則に前進しているおかげでアズミ君とルミ君が放つ砲弾は全て見当違いの場所に着弾しています。
これも完全な固定砲であるが故に精度の高い左右旋回が可能で、また履帯の接地部分が少ないが故に早い速度での超信地旋回が可能なSタンクならではの機動です。

「あああああッ!!……うっぷ」
あ、常夫の事をすっかり忘れていました。
リバースされる前に終わらせましょう。
「せーの……そいや」
『な!?砲身が!?』
『ッ、嘘!?跳弾でやられたの!?』
よしよし、狙い通りにいきましたね。
着発ではなく遅延信管で設定しておいた発煙弾をアズミ君のセンチュリオンの砲身に当てて跳弾させ、そして跳弾した発煙弾でルミ君のセンチュリオンのマズルブレーキを破壊しました。
これでアズミ君は砲身の歪みを確認せねば砲撃が出来なくなり、ルミ君もマズルブレーキの交換をしなければ砲撃は不可能です。
「一丁上がりです」
「止めろと言ったのによくも……気持ち悪い……」
「あぁ、すみません。すっかり忘れていました」
やはり戦車道となると熱くなってしまいますね、アハハ。
「……」

見なくても分かるので振り返りませんが、背後から常夫の恨みがましい視線が飛んで来ています。
『はぁ……また負けた』
『今回もかすり傷さえ付けられなかったわね』
『何を終わったような気でいるの!!さっさと修理と点検を済ませてもう一度挑むわよ!!』
おや？アズミ君がメグミ君とルミ君に叱咤激励を飛ばしています。
うんうん。敗北を糧にして更なる成長を目指すのはいい事で――おっと!?
『今のを避けるなんてね……』
『よ、避けられちゃったよ!!ミカ!!どうするの!?』
アズミ君達を一時戦闘不能にして一息ついていたら左右からの奇襲が……ミカ君達です。
危うく被弾する所でしたよ……危ない危ない。
「なぁ……前々から思っていたんだが、飛んで来る砲弾をどうやって避けてるんだ？」
「それはですね、簡単に言えば勘です」
「……か、勘？」
「ええ、何と言いましょうか……かほさんの地獄のような扱きを乗り越えたら何となく

砲弾がどこに飛んでくるのか分かるようになったんですよ」

「……すまん」

先程とは一転して申し訳なさげになった――かほさんの扱きを私が受ける事になった原因である――常夫から謝罪されましたが……今は恩着せがましい顔で常夫を弄る前にミカ君達の相手をしましょう。

『逃げるよ、ミッコ』

『了解!!』

『早く早く!!わっ!?こっちに来た!!』

逃がしません。君達もここでアズミ君達と共に修理に励んで頂きます。

『ミカ達が不味い!!私達が囮に――』

「それ」

ミカ君を追い掛けると見せ掛けてのナポリターン。

『わっ!?こっちに!?ッ!!嘘!!』

からの履帯破壊。

『ミ、ミカ!!ＢＴ―５が履帯切られちゃったよ!!』

『これは不味いね』

さぁ、これで残るはミカ君達だけです。

ＢＴ―４２が前方の斜面を登りきった瞬間にＢＴ―５と同じ様に履帯を片方だけ破壊してしまいましょう。
『――うわー……あちこちでなんか凄い事になってるみたいだよ、みぽりん』
「え？」
いや、まさか……斜面の向こうから複数のエンジン音が聞こえ……そんな……!?
『あはは……これぐらいだと多分まだまだ序の口なんじゃないかな？あ、麻子さん。斜面を登りきったら一度止まって下さい』
『分かった……わっ、今のは継続高校の――うん？廉太さん？』
『おや、形勢逆転かな』
ミカ君達のＢＴ―４２と入れ替わるようにヘッツァーやＢｌ　ｂｉｓ、ポルシェティーガー、そしてⅣ号戦車が――大洗女子学園代表が現れました。
『え、あれ？おじ……さん？』
……非常に不味いです。
「……」
『……』
「……」
『見　つ　け　た』

神様……。

虚勢と本音の狭間

不味い不味い不味い不味いッ!!
よりにもよってみほちゃんとこんな所で、こんな状況で遭遇するなんて!!
「……ゴクリ」
『……』
今の所は不意の遭遇のお陰で互いに様子見……睨み合いの状況になっていますが、何かしらの切っ掛けがあればすぐにでも――
『撃て!!』
ッ!?危ない!!
『……おじさん?なんで避けるんですか?』
いや、あの、みほちゃん?
そんな事を言われましても避けなければSタンクが撃破されていたんですけど……。
というか、切っ掛けも何も普通に撃ってきましたね。
『避けたりしたら駄目じゃないですか、ね?』
……駄目です。経験則からして、とてもイイ笑顔なのに目が据わっている今のみほ

ちゃんには話が通じません。
「という訳で常夫様、みほちゃんの通訳を――」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
「……」
みほちゃんが放つ禍々しい威圧感でしほさんから受けた折檻の時の記憶でもフラッシュバックしたのか常夫がガタガタ震えながら謝罪の言葉を繰り返しています。
……致し方ありませんね。それっぽい事を言って自分で何とかしましょう。
「ゴホン。こんな楽しい試合をすぐに終わらせてしまうのは惜しいですからね。あぁ、そうだ。しばらく手合わせをしていませんでしたし、ちょうどいい機会です。大洗でどのように成長したのかを直接見させてもらいますよ、みほちゃん」
『ッ、分かりました。……全車発砲。ドッカン作戦は中止してボコボコ作戦を開始します!!』
ヒィー!!早速撃ってきました!!上手いこと煽って私が唯一優位に立てる戦車戦へと誘導しましたが、代償として悪夢の追いかけっこが始まることに……こうなったら逃げるが勝ちです。
尻尾を巻いて一目散に逃げましょう!!
『よし。体当りしてでも仕留めてやる』

『装填はお任せ下さい!!いつもより三割増しで速く装填してみせます!!』
『優しくて大人でイケメンの彼氏。優しくて大人でイケメンの彼氏。優しくて大人でイケメンの彼氏』
『あらあら、これは私も気合いを入れないといけませんね』
　ヒッ!!Ⅳ号戦車が何か黒いオーラを纏っているんですけど!?
『河嶋ーこの試合で当てれなかったら1人であんこう踊りなー』
『そんな!?』
『ファイトだよ、桃ちゃん!!』
『風紀を守るためにも私達が撃破するのよ!!』
『う、うん。分かったよ、そど子』
『……風紀のためと言いつつ撃破出来たら独り占めする気だな、これは』
『よぉし、ここが腕の見せどころ!!』
『いやー気合い入ってるねー。ツチヤ』
『そりゃあ、ツチヤはあれだけモーション掛けてたんだししょうがないんじゃない?』
『うーん。青春だねぇ……よし、ツチヤのためにも一肌脱ぎますか!!』
　って、何かみほちゃん達以外もメチャクチャ気合い入っているんですけど!?
　ま、まぁ……相手がみほちゃん達という事を考慮しても高々4輌程度ならなんとか―

―

『いましたわ!!やっつけますのよー!!』

『おやっさん見っけ!!コンパス作戦大成功っす!!』

ギャー!!ペパロニ君達（２０ｍｍ対戦車ライフル搭載型のＣＶ３３カルロヴェローチェ×２）やローズヒップ君（クルセイダー巡航戦車）が来ました!!

『私達もこの風に流されてみようか』

ミカ君まで引き返してきた!?つまりこれで８輌!?

「いやはや、何とも楽しい事になってきましたねぇ」

ええい!!こんちくしょー!!やってやりますよ!!

遁走

さてさて。あらんかぎりの技術を駆使しつつ追ってくるみほちゃん達との追いかけっこが楽しくて夢中になっていた所、いつの間にか３０分も経ってしまっていました。

……通りでハンドルを握る手が震えている訳です。

歳は取りたくないものですね。若い頃ならまだまだ余裕だったはずなんですが。

『麻子さん。もう少ししたら仕掛けるので、合図したらＳタンクにぶつけるつもりで走ってもらえますか？』

『分かった』

まぁ、平地で逃げ回って雨霰と砲弾の雨を浴び続けるよりはマシかと思って起伏が激しい丘陵地帯に逃げ込んだせいでもあるんでしょうけど。

『華さんと優華里さんは今の内におじさんの回避の癖を掴んでおいて下さい。その時が来たら必殺の一撃をお願いします』

『分かりました』

『了解です!!』

『沙織さんはその調子でそのまま機関銃でおじさんにプレッシャーを与え続けて下さい』
『分かったよ、みぽりん!!』
しかし、丘陵地帯に逃げ込んだお陰で思惑通りに砲弾の雨は浴びずに済んでいますが、代わりに機関銃の弾をこれでもかと浴びているんですよね。
装甲を減らしているせいでこれが地味に痛いです。
それに加えて……。
『オラオラー!!』
『食らえ!!』
「うーん。偏差射撃の腕前は申し分ありませんが、ウィークポイントに弾を当てなければ意味はありませんよ?ですから、もう少し距離を詰めてから撃つか相手の癖を読み取り機動予測を的確にするように」
『この状況で敵に助言とか、さすがおやっさん。余裕っすねぇ!!オラァ!!』
『クッソー!!どうやったらそんな動きが出来るんすか!!』
ペパロニ君とカネロリ君がタンケッテの小回りが効く車体性能を生かしつつ、連発出来る２０ｍｍ対戦車ライフルの弾丸を情け容赦なく叩き込んでくるのも痛いです。
まぁ、エンジンや足回りなどの重要区画には弾が当たらないように立ち回っているの

で今のところ戦闘行動に支障はありませんが。
っと、不味いです。
もしかしてとは薄々感じていましたが、やはり機関銃の弾幕で誘導されていた様ですね。
まんまと丘陵地帯を抜けて平原地帯に出てしまいました。
『チャンス!!エンジン規定はあるけどモーターは無いもんね!!』
『リミッター外しちゃいますわよ!!』
おっと!?好機とばかりに追っ手集団からポルシェティーガーとクルセイダーが突出して一気に距離を詰めて来ました。
このままでは追い付かれてしまいますので、こちらも奥の手を使いましょう!!
「スイッチ、オン」
『あ、しまった!?』
『なんですのあれは!?』
フハハハッ!!遅い遅い!!
Ｓタンクは２種類のエンジン（ディーゼルエンジンとガスタービンエンジン）を搭載している唯一無二の戦車!!
通常は車体右側のロールス・ロイスＫ６０ディーゼルエンジンのみで走行しています

が、今のように必要に迫られた場合は車体左側のボーイング５０２ガスタービンエンジンを併用する事によって高速走行を可能とするんです!!

『不味い、このままじゃ!!っ、あ、あちゃ～……』

『逃がしませんわよ!!っ、おろろろろ!?』

あらら、スピード勝負を始めようとしたら２輌ともエンジンから黒煙を吹いてしまいました。

あぁ、みるみるうちに失速していきます。

ここからが面白い所だったのですが……あの様子では戦線に復帰するのにも時間が掛かるでしょうし。うーん、残念です。

「不本意ながら勝負ありのようですね。さて、追っ手も居なくなりまし――」

『逃がさないよ、おじさん』

「え?」

そ、そんな!?距離を詰めて来たのがポルシェティーガーとクルセイダーだけだと思っていたら、その２輌の後ろにスリップストリームでみほちゃん達がみんな付いて来ているなんて!!

しかもⅣ号とヘッツァーがやけに距離を詰めた状態で――って、まさか!!

『会長!!麻子さん!!お願いします!!』

『ほーい。河嶋ーやっちゃってー』
不味い!!ここで空砲ブーストアタックですか!?
『了解です!!せいッ!!』
来るッ!?
「……あ、あれ？」
えっと、一応空砲の音はしたんですけどね。
『『『……』』』
『……桃ちゃん……目の前なのにどうやって外したの？』
『河嶋、帰ったらあんこう躍りな』
『そ、そんな!?会長～!!』
なんとも締まらない結果になりましたね。しかし、劇場版とかでもそうでしたが河嶋君は魔法でも使えるんですかね。
砲身の向きからは飛ばないであろう方向に砲弾を飛ばせるという意味で。
『あぁ、もう!!私達がやるから退きなさい!!西住さん、行くわよ!!』
『お願いします!!みどり子さん!!』
っと、危ない!!
「ほわっ!?」

『チッ、避けたか』
『撃て!!』
「っ!?……やってくれますね、みほちゃん」
『やりました!!直撃です!!』
『でも、まだ動いています。……次こそは仕留めます』
体当たりを避けるので精一杯だったせいで、回避がギリギリ間に合わずガスタービンエンジンに砲弾が直撃してしまいました。
被弾するなんて久しぶりの事でワクワクしてしましたが……これは普通に不味いです。
っと、足回りにも違和感が。
「常夫!!」
「ごめんなさいごめんなさい……あれ？僕は何を」
ようやく正気に戻ってくれましたか。
逃げ回っている間ずっとフラッシュバックに苦しむなんて過去にどんな折檻を受けていのやら。
知っていましたが……しほさん恐い……。
「ちょっとばかり操縦で手一杯なので後方警戒を頼みます」

うーん……ダメですね、ガスタービンエンジンが完全に止まってしまいました。
はぁ、せっかく逃げ切れるかと思ったのですが手負いの状態で追いかけっこ再開です。
「分かった。あっ、なぁ……悪い知らせがあるんだが」
「……どんな？」
この状況で更に悪い知らせとか聞きたく無いんですけども。
「Ⅳ号戦車の後部に支持架が取り付けてあってその先に爆薬が積んである。多分Ⅰ号戦車が障害物を除去するのに使っていた爆薬の投下装置をⅣ号戦車用に手直しした奴だ」
あぁ……追いかけっこが始まる時にドッカン作戦とかみほちゃんが言っていましたし、大方仕掛けた爆薬の元に私を誘導して吹き飛ばすつもりで用意していたモノでしょう。
……完全に殺る気じゃないですか。

狂喜と凶喜

うーん、どうしましょう。

相変わらず執念深く執拗に追ってくるみほちゃん達の追撃をかわしながら逃げていますが、そろそろ撒いてしまいたい所。

おや？ちょうどいいポイントが近くにあるじゃないですか。ここで撒いてしまいましょう。

『撃て!!』

「残念、また外れです」

外れたとは言え徐々に華君の砲撃の精度が上がっているのが怖いですね。

癖を掴まれましたか。まぁ、私も華君の砲撃の癖を掴みましたからまだ大丈夫ですけど。

『トゥータ!!』

「はい、外れです」

ミカ君は私が他の事を考えていると撃ってきますね。読心術でも使えるんで――

……っと、目的のポイント――原作でみほちゃんが八艘飛びをやってのけた川（原作よ

りも下流の地点）が見えました。
あそこさえ越えてしまえば逃げ切れます。
いざ、突貫!!
『あっ!!おじさんは川を越えて逃げるつもりです!!何とか渡河を防いで下さい!!』
お、みほちゃんが私の目論みに気が付きましたね。
しかし、もう手遅れですよ。
『うーん。みんなどこに行ったんだろう?』
『一度転進されてはいかがですか?西隊長』
『そうだな』
『では――西隊長!!9時方向に目標を視認!!複数の車輌に追われつつこっちに向かって来ています!!』
『なに!?各車、横隊を取れ……よし、西住さん達と挟撃するぞ。突貫!!』
うげッ!?何であんな所に西君達が!?――って、爆雷装備で真正面から突っ込んで来る!?相討ち覚悟ですか!?
「タイミングが悪いですねッ!!」
とりあえず発煙弾を撃ち込んで……視界を奪いましょう。
1発、2発、3発、4発っと。加えて地面に1発。

自動装填装置があるお陰で４秒間隔で撃てるのは助かりますね。
『玉田車、被弾しました!!』
『狼狽えるな!!ただの発煙弾だ!!』
撃った発煙弾が上手い具合に車体にへばり付いたお陰で西君達は完全に盲目状態です。
『隊長殿!!ま、前が全く見えません!!』
『駄目だ、福田!!止まるんじゃない!!足を止めるな!!』
うーん。視界ゼロなので止まってくれるかと思いましたが、西君の指揮により停車までは至りませんでした。残念。
『煙幕晴れます!!』
『よし!!――へ？ぶつかる!!』
『え？』
『あ』
『『『へ？』』』
しかし、ある意味ではそっちの方が都合が良かったりします。
こうやって出会い頭に衝突してくれますし。
『こちらあんこう!!皆さん大丈夫ですか!?』

『やーらーれーたー!!』
『何よこれ!!風紀違反よ!!』
『同士討ちに意味があるとは思えない』
『あいたたた……同士討ちとは無念……』
『玉田車、友軍車輌との接触により行動不能!!』
『細身車、同じく行動不能!!』
『隊長殿!!先輩殿!!』
　さて、西君達の自爆により追っ手の残りはⅣ号と九五式軽戦車ハ号、そしてＣＶ―３３が２輌のみです。
『ひゃーマジヤバイっすね。でも、おやっさんは逃がさないっすよ!!』
　残念、もう遅いです。
「ポチッとな」
『川!?』
『ヤッバ!!』
　ペパロニ君とカネロリ君は私を追う事に夢中で川の存在をすっかり忘れていた様です。
　まぁ、何とかギリギリ川辺の浅瀬で停車出来たようですね。

しかし、あの様子ではエンジンに水が入ってしまったでしょうからペパロニ君達も追撃は無理でしょう。
「では、また」
『あっ、おじさん待って!!』
ハッハッハッ。何を隠そうSタンクは水上航行も可能な戦車なんですよね～。
加えて私のSタンクは常夫の魔改造のお陰でボタン1つで水上航行モードに全自動で移行出来ますし。
『逃げられたな』
『やだもう!!優良物件が逃げちゃったよ!!』
『Sタンク……流石ロマンが沢山詰まった戦車ですね』
『元とは言え西住流の師範代。やはりお強いですわ』
ちなみに渡河するにあたって原作でよりも水深が深いポイントを選んでいますから渡河能力が無いⅣ号とハ号では追撃出来ません。
「ふう……何とかなりましたか」
ようやく逃げ切れました。
川を渡りきってから稜線の影に隠れたので撃たれる心配は無いですし、迂回して渡河して来るにも時間は掛かりますからここで悠々とエンジンの修理でも……あれ？何か

Ⅳ号がバックして――嘘ォ!?
『麻子さん急いで!!』
『分かっている』
爆殺用の爆薬を空砲ブーストの代わりに加速に使ってⅣ号でまさかのＴ型定規作戦を敢行って……不味い!!
に、逃げないと!!